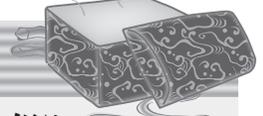


日本人学校・補習授業校 タマテバコ

トビラを開けたら、いろんなものが見えてきた……



AG5プロジェクトにおけるアスンシオン日本人学校(パラグアイ)の取り組み

アスンシオン日本人学校 校長 田口 克敏



パラグアイは多くの日系人が生活する大の親日国です。今回、AG5プロジェクトの日本文化発信の拠点校としてその一翼を担うようになったことは、以前から「パラグアイ」の日本人学校として、「何ができるのか」を模索していた本校において、ある意味「幸運」な巡り合わせでした。「日本文化の発信拠点」としてできることが多く見出せる一方で、「受信」できる可能性もあるからです。ここでは、AG5プロジェクトの観点から、本校がこれまで何を、どのように取り組み、今後は何に向かっていこうとしているのかについて紹介します。

「味噌」「醤油」「豆腐」に「納豆」。これらは日本人にとって伝統的な食材であり、これらを活用した献立の立て方や調理法などは大切な「食文化」である。

パラグアイ共和国には、この「日本の食材や食文化」がしっかりと根づいていて、「日本の真裏にある『日本』」ともいえるほどである。

では、なぜこのような姿が実現しているのか。それは日本人移民が八十余年にわたり、自らの生活と共にこうした文化をパラグアイの地で「発信」し続けてきたからであろう。

アスンシオン日本人学校は、こうした先人が築いてきた信用と伝統が根づくパラグアイ社会のなかで、温かく見守られながら日々の教育活動に取り組んでいる。

一、「アスンシオン日本語学校」との

合同研修を通じた日系人教育

への支援と協働

パラグアイには日本人移住地を中心に九校の「日本語学校」があり、日系人子弟に日本語や日本文化を身につけさせている。

しかし近年は世代交代が進み、周辺国に比べれば高い日本語力を維持しているものの、各地の日本語学校の先生がたの奮闘にもかかわらず、

若い世代ほど「継承語としての日本語」の習得が厳しくなってきた。その理由としては、日本語を母語としない「パラグアイ人」を保護者のどちらかに持つケースが増え、家庭内の会話で日本語が使われず、日本語学校で学んだことを日々の生活の中で繰り返し復習する機会が乏しいなどの事情が挙げられる。

本校はAG5プロジェクトの話が持ち上がる以前から、「運動会」等の行事を通じて「アスンシオン日本語学校(以下「日本語学校」)と相互交流を重ねてきていたが、日本語学校の先生がたが「教授法」や「授業づくり」「授業研究」等について学ぶ機会はかならずしも十分につくれてはいなかった。

そこで二〇一六年後半より、日本語学校の課題解決に寄与する「合同研修」の企画を日本語学校の関ニルタ尚子校長との間で進めてきた。研修に際しては、事前に日本語学校側の「学びたいこと」や「困り感」などのニーズを探るようにした。

すると、日本語学校には特に「国語」指導に関する深刻な悩みがあり、課題解決の道筋を見出したいとの強い思いがあることがわかった。

具体的には、「保護者から『学年相応の漢字を身につけさせてほしい』

と言われても、限られた時間(平日三回の午後や土曜日の六時間余り)で、しかも学んだことを家庭で繰り返し練習することが期待できないなか、どのような漢字指導をすれば効果的か」「長時間の国語の授業をできるだけ飽きさせず、興味関心を喚起させる指導法を知りたい」等があった。それらを踏まえ、一七年七月に本校で合同研修を実施した。

当日は、通常の単元のなかに効果的な漢字の指導法を織りませた授業を展開し、それをもとに研究協議を進めた。協議会では授業や漢字指導だけでなく、学習規律のつくり方、特別な支援を要すると考えられる子どもへの対応などに関する質問も出された。

事後アンケートでは、「参考度」「有意義度」等についてはほぼ一〇〇%の満足度を得られ、全員から次回も参加したいとの回答が寄せられた。自由記述でも「日本の教育を実施している先生がたの授業を見られて勉強になった」「国語教育以外(生活指導、作文指導、プロセス評価等)も学びたい」との声があり、合同研修が日ごろから感じている課題を解決する糸口になり得た様子がうかがえ、手ごたえを感じた。

また本校としても、自らの教育ス

キルが現地の教育関係者のために役立つと実感できたことは大きな収穫だった。

さらに一八年一月にはAG5プロジェクトの一環として、日本語学校の先生二名と、同じく当地で日本式教育を実践している日本パラグアイ学院の先生一名が訪日し、日本の学校や教育機関等において十日間の教育研修を積んだ。

それらの成果も踏まえ、二月に二度目の合同研修を実施。今回は本校の教員が日本語学校に出向き、年度初めの授業に参画する形で行った。

「年度当初の学級開きはどのようにすればよいのか」「学習の導入時における動機づけはどう指導すればよいのか」「学習規律や生活規律を年度初めに徹底したい」など、担任ごとに異なる課題意識に対し、ペアとなった本校の教員が事前に助言・協議して授業づくりを進めることにした。これにより、日本語学校の先生がたが「日本式教育」を学び、その指導スキル向上がはかられることを期待した。

一八年度の本校の「校内研究」は、その三分の一の時間を日本語学校との合同研修を踏まえたAG5プロジェクト関連として確保している。これにより一七年度以上に日本語学校に対して深く広く「日本式教育」を

浸透させ、日系子弟への日本語教育等に寄与したいと考えている。

二、「日本語学校との「共通教材」の開発」

本校はこれまでに、小学部社会科の副読本として『わたしたちのパラグアイ』を作成してきた（日本では、身近な地域の様子や歴史の学習などのための副読本づくりは、各自自治体を中心となりよく行われている）。

これを下敷きにして、今回のプロジェクトにおいて本校では『わたしたちのパラグアイ』の改訂版を、日本語学校ではパラグアイの日系子弟のための初めての副読本づくりを、双方で協議しながら進めている。共通した章立てを含み、使用する題材にも共通したものを設定し、「日本側の視点」と「パラグアイ側の視点」が対比されるような形で作成したいと考えている。また日本語学校に通う日系子弟にとっては、自分たちの身近な生活について学ぶだけでなく、課題を設けて自らが調べてまとめたり、意見や考えを述べたりできるような構成を立てることで、国語学習のワークブックとしても活用できるとする。

さらに日本語学校のもう一つの課題である「日本人移住」についての

学びの基礎が確実にできるよう、移住の歴史や人々の苦勞、パラグアイ社会に日系人が何をもちたらし、どのように貢献してきたのか等、子どもたちのアイデンティティ形成に資するような内容を組み込んでいきたい。

一方、本校としてはこれまでの『わたしたちのパラグアイ』をベースに、本プロジェクトを通して日本語学校との協議や資料検討を進めることで、従来の副読本にはなかった「パラグアイ側の視点」を織りませ、日本とパラグアイの友好関係や企業進出など新たな分野を盛り込む。日本語学校の協力を得て「日本人移住」をさらに掘り下げて学べる教材としても進化させていきたい。

三、「日本文化の発信」をどのように捉えるか

AG5のプロジェクト「日本文化発信の拠点形成」では、何をもちて「日本文化」と捉えるかが問題だった。本校ではこれまで、「運動会」

や現地校と交流するなかでの「昔あそび」や「習字」、「浴衣の着つけ体験」等を通して日本文化を発信してきた。

しかし「日本文化の発信拠点」とはたしてそういうことなのか、学校でなければできない「日本文化の発信」とは何なのかを突き詰めた結

果、世界でも浸透しつつある「授業研究」を含む「日本の教育文化」や「清掃活動」「規律」などの「学校文化」こそ、学校が積極的に発信すべき「日本文化」ではないかということにたどり着いた。

政府派遣教員は自校の教育活動に専心する一方で、自らが身につけている多様なスキルが、派遣国の教育においてもきわめて有効であることに気づかなければいけない。そして、機会を設けて積極的に現地社会に働きかけることにより、日本人学校の付加価値を高め、ひいては日本の「ファン」をその地域に増やすことにつながることを自覚していく必要があるのではないか。

在籍者数が少ないからその学校は不要、という発想はたんに「数」だけに注目するからである。日本人学校の中身に代えがたい価値が見出され、設置国からも必要とされる存在になれば、「拠点」として残れる可能性は高くなるだろう。

本校が将来にわたり、こうした「日本文化の発信」に取り組み続けられ、やがて「日本の食文化」がこの地に受け入れられ、いまや欠くことができなくなつたように、この国の教育を大きく変えることにつながるものと考えているし、そう願いたい。